

# 線形代数

## 第14回「内積」

---

萩野 達也

hagino@sfc.keio.ac.jp

<https://vu5.sfc.keio.ac.jp/slide/>

# 今日の内容

- 内積に関する話題に関して解説する
  1. 内積, 正規直交基底
  2. グラム・シュミットの正規直交化法
  3. 計量線形性, 直交行列

# 内積

## 定義14.1

- $\mathbb{R}^n$  上の内積を,  $\mathbf{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix}$ ,  $\mathbf{y} = \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{bmatrix}$  に対して

$$(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = {}^t \mathbf{x} \mathbf{y} = [x_1, \dots, x_n] \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{bmatrix} = \sum_{i=1}^n x_i y_i \in \mathbb{R}$$

で定義する.

- また,  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$  のノルム(長さ)を次で定義する.

$$\|\mathbf{x}\| = \sqrt{(\mathbf{x}, \mathbf{x})} = \sqrt{\sum_{i=1}^n x_i^2}$$

# 双線形性

## 定理14.2

- 内積は写像  $(\cdot, \cdot): \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$  であり,
- 任意の  $x, y, z \in \mathbb{R}^n, a \in \mathbb{R}$  に関して以下が成り立つ.

1.  $(x + y, z) = (x, z) + (y, z)$

2.  $(a x, y) = a (x, y)$

3.  $(x, y + z) = (x, y) + (x, z)$

4.  $(x, a y) = a (x, y)$

- これらを内積の**双線形性**という.

- たとえば

$$(a x + b y, c z + d w) = a c (x, z) + a d (x, w) + b c (y, z) + b d (y, w)$$

- さらに, 任意の  $x, y \in \mathbb{R}^n$  に関して以下が成り立つ.

5.  $(x, y) = (y, x)$

6.  $(x, x) \geq 0$

7.  $(x, x) = 0 \Leftrightarrow x = 0$

# シュワルツの不等式

定理14.3(シュワルツの不等式)

- 任意の  $x, y \in \mathbb{R}^n$  に対して

$$|(x, y)| \leq \|x\| \|y\|$$

- 等号成立の必要十分条件は  $x, y$  が一次従属であること.

- 不等式を具体的に書けば

$$\left| \sum_{i=1}^n x_i y_i \right| \leq \sqrt{\sum_{i=1}^n x_i^2} \sqrt{\sum_{i=1}^n y_i^2}$$

# シュワルツの不等式(証明)

- $y = 0$  であれば両辺とも 0 であるから成り立つ.
- そこで,  $y \neq 0$  と仮定する.
- $k = \frac{(x,y)}{\|y\|^2}$  とおくと

$$\begin{aligned} 0 &\leq \|x - k y\|^2 \\ &= \|x\|^2 - 2k(x, y) + k^2 \|y\|^2 \\ &= \|x\|^2 - 2 \frac{(x, y)^2}{\|y\|^2} + \frac{(x, y)^2}{\|y\|^2} \\ &= \|x\|^2 - \frac{(x, y)^2}{\|y\|^2} \end{aligned}$$

- これより  $(x, y)^2 \leq \|x\|^2 \|y\|^2$  であり,  $|(x, y)| \leq \|x\| \|y\|$  となる.
- 等号が成り立つのは  $x - k y = 0$  のときに限る.
- つまり,  $x, y$  は一次従属.

# 三角不等式

定理14.4(三角不等式)

- 任意の  $x, y \in \mathbb{R}^n$  に対して

$$\|x + y\| \leq \|x\| + \|y\|$$

- 等号成立の必要十分条件は,  $x, y$  が一次従属であること.

証明

- 直接計算で示すことができる.

$$\begin{aligned}\|x + y\|^2 &= \|x\|^2 + 2(x, y) + \|y\|^2 \\ &\leq \|x\|^2 + 2\|x\|\|y\| + \|y\|^2 && (\because \text{定理14.3}) \\ &= (\|x\| + \|y\|)^2\end{aligned}$$

# 極化恒等式

定理14.5(極化恒等式)

- 任意の  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n$  に対して

$$(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \frac{1}{4} \|\mathbf{x} + \mathbf{y}\|^2 - \frac{1}{4} \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|^2$$

証明

- 右辺を計算で示すことができる.

$$\|\mathbf{x} + \mathbf{y}\|^2 = \|\mathbf{x}\|^2 + 2(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + \|\mathbf{y}\|^2$$

$$\begin{array}{r} -) \quad \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|^2 = \|\mathbf{x}\|^2 - 2(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + \|\mathbf{y}\|^2 \\ \hline \end{array}$$

$$\|\mathbf{x} + \mathbf{y}\|^2 - \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|^2 = 4(\mathbf{x}, \mathbf{y})$$

# 角度・直交性

## 定義14.6

- シュワルツの不等式(定理14.3)より

$$-1 \leq \frac{(x, y)}{\|x\| \|y\|} \leq 1$$

であるから

$$\cos \theta = \frac{(x, y)}{\|x\| \|y\|}$$

となる  $0 \leq \theta \leq \pi$  が存在する.

- この  $\theta$  を  $x, y$  のなす **角度** という.
- $\theta = \frac{\pi}{2}$  (つまり  $(x, y) = 0$ ) であるとき,  $x, y$  は **直交** するという.
- 定義より,  $0 \in V$  は全ての元と直交する.

# 正規直交性

## 定義14.7

- $v_1, \dots, v_k \in \mathbb{R}^n$  が**正規直交**であるとは

$$(v_i, v_j) = \delta_{ij} = \begin{cases} 1 & (i = j) \\ 0 & (i \neq j) \end{cases}$$

となることをいう. ( $\delta_{ij}$ : クロネッカーのデルタ)

- つまり,  $v_1, \dots, v_k$  が正規直交であるとは,
  1. 各ベクトル  $v_i$  の長さが 1 である:  $\|v_i\| = 1$
  2.  $i \neq j$  であれば,  $v_i, v_j$  が直交する:  $(v_i, v_j) = 0$

# 正規直交性と一次独立

## 定理14.8

- $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k \in \mathbb{R}^n$  が正規直交であれば一次独立である.

## 証明

- $\sum_{i=1}^k c_i \mathbf{v}_i = \mathbf{0}$  とすると

$$\left( \sum_{i=1}^k c_i \mathbf{v}_i, \mathbf{v}_j \right) = \sum_{i=1}^k c_i (\mathbf{v}_i, \mathbf{v}_j) = c_j \|\mathbf{v}_j\|^2 = c_j$$

- 一方で,  $(\mathbf{0}, \mathbf{v}_j) = 0$  であるから  $c_j = 0$  であり,  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_k$  は一次独立.
- 一般に, 一次結合の係数が内積で取り出せる事実は重要である.

$$\left( \sum_{i=1}^k c_i \mathbf{v}_i, \mathbf{v}_j \right) = c_j$$

# 正規直交基底

## 定義14.9

- $v_1, \dots, v_n \in \mathbb{R}^n$  が**正規直交基底**であるとは、基底かつ正規直交であることをいう.

- 例えば,  $\mathbb{R}^n$  標準基底

$$e_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, e_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, \dots, e_n = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 1 \end{bmatrix}$$

は正規直交基底である.

# 正規直交基底(例)

## 例14.10

- $\mathbb{R}^2$  の正規直交基底として  $\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix}$  や  $\frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix}, \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix}$  を考えることができる。

- 実際, 例えば

$$\left\| \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ \pm 1 \end{bmatrix} \right\|^2 = \left( \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ \pm 1 \end{bmatrix}, \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ \pm 1 \end{bmatrix} \right) = 1$$

$$\left( \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix} \right) = 0$$

# 正規直交基底

- 正規直交基底  $v_1, \dots, v_n \in \mathbb{R}^n$  が与えられたとき, 任意の  $x \in \mathbb{R}^n$  は

$$x = \sum_{i=1}^n x_i v_i \quad x_i = (x, v_i)$$

と書くことができる.

- $y = \sum_{i=1}^n y_i v_i$  との内積は

$$(x, y) = \left( \sum_{i=1}^n x_i v_i, \sum_{i=1}^n y_i v_i \right) = \sum_{i=1}^n x_i y_i$$

- 特に  $x = y$  として

$$\|x\|^2 = \sum_{i=1}^n x_i^2$$

# 射影

## 定義14.11

- 長さ1のベクトル  $u \in \mathbb{R}^n$  に対して、 $u$  方向への射影を次で定義する.

$$p_u: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}\langle u \rangle, \quad v \mapsto (v, u) u$$

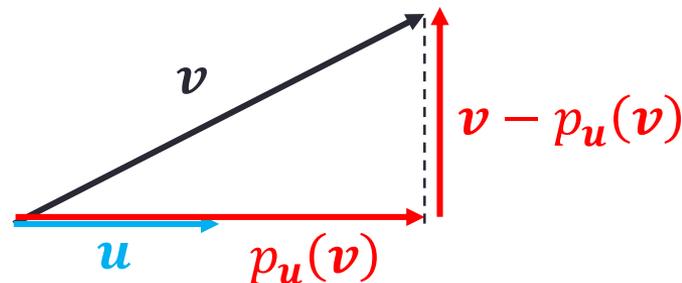
- $p_u$  は  $v$  を直線  $\mathbb{R}\langle u \rangle$  へ直交射影する線形写像である.
- 実際

$$\begin{aligned} (u, v - p_u(v)) &= (u, v - (v, u) u) \\ &= (u, v) - (v, u) \|u\|^2 = 0 \end{aligned}$$

であり、直交分解

$$v = p_u(v) + (v - p_u(v))$$

が成り立っている.



# グラム・シュミットの正規直交化法

- 任意の一次独立なベクトル  $v_1, \dots, v_k \in \mathbb{R}^n$  に対して, 正規直交するベクトル  $w_1, \dots, w_k \in \mathbb{R}^n$  で

$$\mathbb{R}\langle w_1, \dots, w_k \rangle = \mathbb{R}\langle v_1, \dots, v_k \rangle$$

なるものを構成する標準的な方法が存在する.

- より厳密には, 任意の  $1 \leq i \leq k$  に対して

$$\mathbb{R}\langle w_1, \dots, w_i \rangle = \mathbb{R}\langle v_1, \dots, v_i \rangle$$

が成り立つ.

- この構成法は, **グラム・シュミットの正規直交化法**と呼ばれる.
- 特に  $k = n$  として, 任意の基底から正規直交基底が得られる.

# グラム・シュミットの正規直交化法(1)

- (ステップ1): まず

$$w_1 = \frac{v_1}{\|v_1\|}$$

と定義する.

- このとき

$$\|w_1\|^2 = \left( \frac{v_1}{\|v_1\|}, \frac{v_1}{\|v_1\|} \right) = \frac{\|v_1\|^2}{\|v_1\|^2} = 1$$

であるから,  $w_1$  は長さ 1 に正規化されている.

- (ステップ2): 次に

$$w'_2 = v_2 - p_{w_1}(v_2)$$

と定義する.

- $v_1, v_2$  は一次独立であるから,  $w'_2 \neq 0$  であり,  $w'_2$  は  $v_2$  を  $w_1$  方向と直交分解したもののなので,  $w'_2$  は  $w_1$  と直交する.
- そして, 次のように  $w_2$  を定義することで長さを 1 に正規化する.

$$w_2 = \frac{w'_2}{\|w'_2\|}$$

# グラム・シュミットの正規直交化法(2)

- (ステップ3):次に

$$\mathbf{w}'_3 = \mathbf{v}_3 - p_{\mathbf{w}_1}(\mathbf{v}_3) - p_{\mathbf{w}_2}(\mathbf{v}_3)$$

と定義する.

- $\mathbf{w}'_3$  は  $\mathbf{v}_3$  から  $\mathbf{w}_1$  方向への射影と  $\mathbf{w}_2$  方向への射影を除いたものなので,  $\mathbf{w}_1$  と  $\mathbf{w}_2$  に直交する.
- そして, 次のように長さを 1 に正規化する.

$$\mathbf{w}_3 = \frac{\mathbf{w}'_3}{\|\mathbf{w}'_3\|}$$

- この手続きを繰り返す
- (ステップ  $j$ ):まず

$$\mathbf{w}'_j = \mathbf{v}_j - \sum_{i=1}^{j-1} p_{\mathbf{w}_i}(\mathbf{v}_j)$$

と定義し, 次に

$$\mathbf{w}_j = \frac{\mathbf{w}'_j}{\|\mathbf{w}'_j\|}$$

で長さを 1 に正規化する. このとき  $\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_k$  は正規直交する.

# グラム・シュミットの正規直交化法(例)

- $\mathbb{R}^2$  の基底  $v_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}$ ,  $v_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}$  にグラム・シュミットの正規直交化法を適用する.

- まず

$$w_1 = \frac{v_1}{\|v_1\|} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}$$

- 次に

$$\begin{aligned} w_2' &= v_2 - (v_2, w_1) w_1 \\ &= \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} - \frac{1}{\sqrt{2}} \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} = \frac{1}{2} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

- したがって, 正規直交基底

$$w_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} \quad w_2 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix}$$

を得る.

- 一方で, 基底順番を入れ替えて  $v_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}$ ,  $v_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}$  に適用すると, 別の正規直交基底を得る.

$$w_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} \quad w_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

# グラム・シュミットの正規直交化法(例)

- $\mathbb{R}^3$  の基底  $\mathbf{v}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$ ,  $\mathbf{v}_2 = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 3 \end{bmatrix}$ ,  $\mathbf{v}_3 = \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix}$  に正規直交化法を適用する。

- まず

$$\mathbf{w}_1 = \frac{\mathbf{v}_1}{\|\mathbf{v}_1\|} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

- 次に

$$\mathbf{w}'_2 = \mathbf{v}_2 - (\mathbf{v}_2, \mathbf{w}_1) \mathbf{w}_1 = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 3 \end{bmatrix} - \sqrt{2} \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix} \quad \mathbf{w}_2 = \frac{\mathbf{w}'_2}{\|\mathbf{w}'_2\|} = \frac{1}{3} \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix}$$

- 最後に

$$\mathbf{w}'_3 = \mathbf{v}_3 - (\mathbf{v}_3, \mathbf{w}_1) \mathbf{w}_1 - (\mathbf{v}_3, \mathbf{w}_2) \mathbf{w}_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix} - \frac{3}{\sqrt{2}} \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} - \frac{11}{33} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix} = -\frac{5}{8} \begin{bmatrix} -1 \\ -4 \\ 1 \end{bmatrix}$$

- よって、以下の正規直交基底が得られる。

$$\mathbf{w}_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}, \mathbf{w}_2 = \frac{1}{3} \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix}, \mathbf{w}_3 = \frac{\sqrt{2}}{6} \begin{bmatrix} -1 \\ -4 \\ 1 \end{bmatrix}$$

# 計量線形性

## 定義14.12

- $n$  次正方行列  $A$  が定義する線形写像  $f_A: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$  が計量線形 (もしくは計量を保つ) とは, 任意の  $x, y \in \mathbb{R}^n$  に対して

$$(f_A(x), f_A(y)) = (x, y)$$

が成り立つこと.

- $f_A$  が計量線形であるとき,  $f_A$  は単射となる.
- まず,  $f_A(x) = \mathbf{0}$  とすれば

$$0 = \|f(x)\|^2 = \|x\|^2$$

より,  $x = \mathbf{0}$  である. つまり計量線形写像はベクトルの長さや角度を変えないので, ベクトルが潰れることはない.

- さらに,  $f_A(x) = f_A(y)$  とすれば, 線形性より  $f_A(x - y) = \mathbf{0}$  であるが, 上に示したことより,  $x - y = \mathbf{0}$ . よって  $x = y$ .

# 直交行列

## 定義14.13

- $n$  次正方行列  $A$  が直交行列であるとは

$${}^t A A = E_n$$

が成り立つこと. つまり,  $A^{-1} = {}^t A$ .

- $\mathbb{R}^n$  の内積が

$$(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = {}^t \mathbf{x} \mathbf{y} = [x_1, \dots, x_n] \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{bmatrix} = \sum_{i=1}^n x_i y_i$$

で与えられることを思い出す.

# 直交行列の性質

## 定理14.14

- $n$  次正方行列  $A$  に関して次は同値である.
  1.  $A$  は直交行列である.
  2.  $f_A: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n, v \mapsto Av$  は計量線形である.
  3.  $A$  の列ベクトルは  $\mathbb{R}^n$  の正規直交基底である.

## 証明

- $1 \Rightarrow 2$ : 一般に行列の積の転置に関して  ${}^t(B C) = {}^t C {}^t B$  に注意すると
 
$$(A x, A y) = {}^t(A x) A y = ({}^t x {}^t A) A y = {}^t x ({}^t A A) y = {}^t x y = (x, y)$$
- $2 \Rightarrow 3$ :  $f_A: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n, e_i \mapsto A e_i$  であって、正規直交基底の計量線形写像の像は正規直交基底になるため.
- $3 \Rightarrow 1$ :  $({}^t A A)_{ij} = (A e_i, A e_j) = \delta_{ij}$  より,  ${}^t A A = E_n$ .

# まとめ

- 内積に関係する話題に関して説明した.
  1. 内積, 正規直交基底
  2. グラム・シュミットの正規直交法
  3. 計量線形性, 直交行列